

第二十一組 「推進員の集い」 講話録

二〇一四年十二月六日 難波別院堺支院にて

推進員に

なつたけれども……

お話

おおはし
大橋

えしん
恵真

先生

第十八組

おんぎやうじ
遠慶寺

住職



さんきえもん
三歸依文

人身にんじん受け難がたし、いますでに受く。仏法ぶつぽう聞き難し、いますでに聞く。
この身み今生こんじょうにおいて度どせずんば、さらにいづれの生しやうにおいてかこの
身を度たせん。大衆だいしゆうもろともに、至心ししんに三宝さんぽうに歸依きえし奉たてまつるるべし。

自らぶつ仏に歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆじやうとともに、
大道だいたうを体解たいげして、無上意むじやういを發おこさん。

自らそ法に歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆうじやうとともに、
深くきやうぞう経藏きやうぞうに入りて、智慧ちえ海のごとくならん。

自らだ僧しゆうに歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆうじやうとともに、
大衆だいしゆうを統理とうりして、一切いさい無碍むげならん。

無上むじやう甚深じんじん微妙みみょうの法ひやくせんまんごうは、百千万劫ひやくせんまんごうにも遭遇あいあうこと難かたし。我われいま見聞けんもんし
受持じゆじすることを得たり。願ねがわくは如来にがたの眞実しんじつ義ぎを解げしたてまつらん。

はじめに

歳末になりました、世の中が何かそわそわと慌ただしくなっていました。また、今日は大変冷え込みますが、そんな中をよくご参加くださったこととございます。皆様方の求道の意欲、道を求めようという心にたいへん敬意を表することとございます。

私は柏原市から参りました大橋と申します。大阪の南東の方、生駒山系の山の裾野にお寺が建っています、北東の方には天王寺のハルカスが見えています。そういうところからお邪魔させてもらいました。

事務をしてくださっている山雄さんからご依頼をいただきまして、講題は「推進員になったけれども・・・」でお願いしたいということでした。要は、推進員になったけれども具体的に何を推進したら良いのか分からない。また推進員というのはどういう役割が期待されているのか、これもよく分からない。そういう意味が込められている講題だと私はいただきました。ですから今日はまず、推進員は何を推進する人なのかを共に考えていきたいと思えます。

何を推進するのか。先ほど、組長さんのご挨拶に「お寺にみんなでお参りする」「誘い合う」というお話がございましたね。まずこれが、推進員さんに期待される大切なお仕事です。

ところが、お誘いしてもお友達がなかなかお寺に来てくれないことはないですか。「お寺にお

参りしましょう」と誘っても「その日は諸用がありますから」と断られることが多いでしょう。みんな自分の楽しい趣味の会にはいそいそと出掛けるのに、お寺には足が向かないのはどうしてでしょう。

「話が難しくよく分からない」ということもよく聞きます。確かに楽しくないと行く気がありませんし、何かそこで得るものがないと足が向きません。お寺に足が向かないということは「行っても楽しくないし、お話は難しくよく分からない」ということでしょうか。

では「いったい私たちはお寺に何を求めているのか」その辺から考えたほうが良いみたいです。皆様方はお寺に何を求めていますか。お寺に行ってお参りしたからといって、宝くじが当たるわけでもないですね。お寺に健康法を求めるということでもなさそうです。では、お寺は何を学ぶところなのですか。

先生の生き様をとおして

私に浄土真宗という仏教を教えてください。くださったのは寺川俊昭先生てらかわしゅんしやうです。大谷大学に入学しまして、先生のゼミに入れていただいたのですが、お話はまあ難しかったです。言葉が仏教の専門用語ばかりで講義を聞いてもほとんど分かりませんでした。

しかし先生の側そばにおりますと、言葉ではなくて先生の生き様から伝わってくるものがあります。そこには、何か魅せられるものがありますね、「ああ僕もこんな先生みたいになれたらいいのにな」と、すごく憧あこがれたことがありました。

先生は一言でいいましたら大変謙虚なのです。謙虚といってもペコペコ頭を下げられておられるということではないのです。学生の前でも絶対に偉そうになさらない。自慢話もされない。お酒を飲んでもそれは変わりませんでした。

難波別院にずっとお話にこられた時期がありましたので、大阪在住のゼミ生は卒業後もお話を聞きに行っていました。お話が終わって京都へお帰りになる際はいつもみなでお見送りいたします。先生は淀屋橋駅までタクシーで行かれたら良いのに「地下鉄に乗ります」とおっしゃるのです。当時、大谷大学の学長ですよ。学長先生が八時ごろ混雑している地下鉄で揺られて帰るのです。それで私たちホームまで行きまして「先生ありがとうございました」と頭を下げますと先生も車中から頭を下げられます。それでふっと頭を上げたら先生はまだ頭を下げられておられるのです。慌ててこちらも頭を下げ直すのですが、次に頭を上げたらもう電車が行ってしまった後です。凄いなあと思いました。歳は私たちと三十五ぐらい離れているのですよ。その方が学生あがりの者に深々と頭を下げられるのです。

それともう一つは、与えられたお仕事に対する姿勢です。人間として果たして行かなければ

ならないそれぞれが抱える雑多のことが毎日あるではないですか。会社でのお仕事にせよ、家事やら育児やら、あるいは地域の中でいろいろやっていかなければならないことなどいっぱいありますね。先生は、そういう一つ一つの細かいことをきっちり丁寧な果たしておられました。私のようなものがお歳暮とかを送りましても、必ず直筆で「ありがとうございます」とお礼状が届きます。ちょっと真似できませんね。また、時間があれば原稿を書いておられました。与えられたお仕事、目の前のことを丁寧に果たしていかれる、いえ尽くしていかれるお姿を見せていただきました。

このように謙虚に生きるということが浄土真宗という仏道を生きている方の生き様というか、生きて行く姿だと私はいただいたのです。学長先生が私たちみたいな若造に頭を下げる。それは礼儀で下げているわけではないのでしょうか。まさか、へりくだっておられるわけでもない。あれは私たちに頭を下げておられたのではなく、私たちが親鸞聖人の仏教を学ぼうとする心に敬意を表しておられたのでしょうか。それは、ともに仏道を歩もうとする御同朋としての姿を見つめてくださっていたのでしょうか。

とにかく私は寺川先生のお姿から「ああこれが南無阿弥陀と念仏して生きるということ。ここに生きた仏教がある。これが信心の生活なのだ」と教えていただいたのです。

ああいう謙虚さは、全ての人が尊い御同朋だおんどうぼんとだけ信じた利益だと思つたのです。また、

目の前の雑多なことにも誠実に、丁寧しんよに処はしていくことができるというのも信心の御利益ではないでしょうか。

私たちは、楽しいことや自分にとって都合のよいことは進んでしますが、しんどいことや都合の悪いことはついつい遠ざけます。しかし、自分にとって都合の良いことも、都合の悪いことも「全部丸ごとこのままが私の人生であった」と、私の人生のすべてを引き受けて処はしていく。そういう励ましや勇気をいただけるのが、南無阿弥陀仏と念仏して生きる信心の生活だと先生から教えていただきました。

だから自分が求めていたのは、表面的には先生のように成りたいということでしたが、その内実は「先生と等質の信心を得たいということと、信心を得るといふことの大切さ」ということを先生の生き様を通して教えていただいたのです。

皆様も養成講座の最中によく「信心が大切です」とお聞きになられたことかと思えます。そして「お寺というのは、信心を獲得するための教えを聞く道場だ」と何度もお聞きになられたのではないですか。「お寺は聞法の道場である」と。ですから推進員のお仕事は、まずは自身の聞法を推進していくことであり、次にそこから自分の信心を推進していくことです。

信心を推進していくことは、まだ信心を得ていない人は信心を得るために法を聞く、聞法するということを自分自身に推進していくということです。

そして聞法の努力によって、私が南無阿弥陀仏と念仏するものになって信心を喜ぶものになってゆく。そこには、自分にとって都合の良いことも悪いことも「これが私の人生だ」と、謙虚にすべてを引き受けていく生活が開かれてくるのです。先生はそのような生活を「いぶし銀のように光り輝く人生」とよく言っておられました。

そうでないと、いくら友達を誘っても「あなた、よくお寺に行ってお話聞いているけれど、別に輝くようなものがあるわけでもないし私と何も変わらない。何も変わらないのならお寺へ行っても無駄でしょ」という話になってしまいます。

ですからお誘いしても来てくれないということとは、私に信心の魅力がないということなんです。どう言ったらいいのでしょうか、私もそうですが、私たち一人一人が念仏に生きていないから、それがお誘いした人には分かるのでしょうかね。念仏に生きているか生きてないかは直感で分かるみたいです。ですからお誘いしても「それだったら行っても無駄」という話になるのだと思います。

先ほど司会の方が「光り輝くような世界にしたい」とおっしゃいましたが、私自身が光り輝いていなかったら世界は光り輝きません。世界は勝手にピカピカ光り輝きません。それこそ何

かお寺でいただくものがあって、私が光り輝くような生き方をして初めて世界が光り輝いて見えてくるのですね。

とにかく自分の信心を推進していき、自分が南無阿弥陀仏と念仏していくのです。そういう人間に育てられていくことが推進員として期待されています。それが実現していったならば、自ずと人を誘って「念仏はいいものですよ。南無阿弥陀仏はこんなに素晴らしい。みんなお寺にいったって、私がいただいたこの素晴らしい南無阿弥陀仏を分かち合いましょう」という言葉が出るでしょう。自分が実証していますから説得力もありますし、心動かされるものがあると思うのです。少し休憩いたします。

本願ほんがんの力

後半は、信心、または信心の生活というのはどういうものであるのかをお話したいと思えます。

先ほど寺川先生のお言葉から、私の人生が「いぶし銀のように光り輝く人生」になっていくとご紹介しました。この「光り輝く」ということを手がかりにお話を進めてまいります。結論から申しますと、煩惱ぼんのういっばいの私たち凡夫ぼんぶに光り輝くような人生を実現させるのは本願ほんがんです。

その本願の教え、これを「法」といいます。その「法」つまり本願の教えを聞くことが聞法もんぼうです。聞法のみが、私たち凡夫に光り輝くような人生を実現するのです。

本来、仏教で「法」というのは、お釈迦様の覚りということですから一般に仏教と呼ばれるものでは、修行して煩惱を断じてお釈迦様が得られた涅槃ねはんの覚りを得て行くことを仏道だと理解されます。

ところが推進員養成講座の先生から修行しなさいって言われたことありますか。ないでしょう。千日回峰せんじちちかいほう行しましょうとおっしゃらなかったでしょ。あるいは、断食だんじきしましゅうとか座ざ禅ぜん組みなさいとおっしゃいませんね。とにかく「お話を聞いてください、聞法してください」ということを重ねておっしゃっていったと思います。浄土真宗は「法」を聞くのですね。

お釈迦様の覚りを自分が悟っていくのではないのです。修行しても、煩惱がいっぱいだから覚りを得ることができない私たちのために、お釈迦様は本願の教えを説いてくださったのです。

では、本願の教えとは、いったい何が説かれているのでしょうか。一言でいえば「阿弥陀様が私たちに本心に願ってくださったこととは、このようなことですよ」と四十八力条に渡って説いてあるのです。『仏説無量寿経ぶつせつむりょうじゆきやう』というお経に説いてあります。その本願の教えを「なるほどそうだな」とうなずくこと、つまり阿弥陀様の方から私たちに向かって「こうなってくださいよ」と願っておられる教えを聞いて「ああ、なるほどそうだった。阿弥陀様が願っておら

れたことこそ、実は私が本当に願っていたことなのだ」と、ただけた心のことを信心といふのですね。

普通、信心といったらどういふことを想像しますか。何か「神様とか仏様とかが、どこかあの世におられる」ことを信じ込む、また「何か分からないのだけれども仏様といふのはありがたいな」と言っていて信仰する。あるいは熱心にお寺にお参りする人を「あの人は信心家」と言いますよね。

けれど親鸞聖人がおっしゃる信心といふのは、そういう世間の信心といふ言葉ではなくて「四十八ある本願の教えは、なるほど私の心底しんていからの本当の願いをよく見抜いて説いてくださっていたのだ」と気づいたお心を言うのです。

私たちは普通、日常の生活ではいつも健康やお金、地位や名誉や権力などを貪欲どんよくに求めて生きています。つまり、自分の思い通りに生きることしか思いつきません。しかし本願は、私たち一人一人が本当になりたい私をよく見抜いて「あなたは、本当はこういう生き方をしたいと願っているのではないですか」「こういう人間になりたいと思っっているのではないですか」と、教えてくださっているのです。そして、そのお言葉にうなずいた心を信心といふのです。

ですから、信心といふのは私の中に芽生えた心なのだけれども、私の心ではなくて、阿弥陀様の願いとして、私がいただいたお心のことを信心といふのです。阿弥陀様の側にあつたら「本

願」です。本当の願い、その願いが私に響いてきた、その通りだとうなずいたら、それが「信心」と名前を変えるのです。

この信心は、私に生きる意欲と、生きる希望と、嫌なことでもやっていこうという力を与えてくださるのです。そこが本願の力のすごいところですね。私たちの煩惱の心は、私たちの欲望にかなうことはしたいけれど、欲望にかなわない嫌なことはしたくないでしょう。けれども、本願の心は私たちの煩惱よりも、もっと深いところに届いてくるのです。煩惱を超えた深い願いのお心のことを信心というのですね。

そのままで光り輝く

本願の中には四十八力条にわたっていろいろなことが説かれてありますが、今日は先ほどから申しています「金色に輝く」ということをお話しいたします。本願の第三願にそのことが説かれています。

四十八それぞれに願名(がんめい)(科文(かもん))というのがあります。江戸時代の偉い先生がそれぞれの本願にはどういうことが書いてあるのかを、一言でまとめられたものです。真宗聖典をお持ちの方は九七三ページに書いてあります。

第三願は「悉皆金色」の願とあります。これは、「ことごとく皆金色に光り輝くような人生を歩んでいきたいと思っておられるのでしよう」と、本願の方から言ってくださっているのです。でも、実際には本願はすでに成就しています。法蔵菩薩は阿弥陀様になられたのですからね。だから、本当は私の毎日の生活が光り輝いているはずで、それなのに煩惱が邪魔して光り輝いてないように思ってしまうのです。どうですか、みなさまがたは毎日が光り輝いておられますか。自坊のご門徒さんに聞いたなら「住職さん、私なんかもうあかんわ。五十年前やったら、今よりは光り輝いていましたけど」と、おっしゃっていました。でも本願は「今こうしてここに生きておることが本当は光り輝いているのでしよう」と言ってくださるのです。

その具体的なことが第四願に説いてあります。「無有好醜」の願、あるいは「形色不同」の願とも言います。「形色不同」とは、形も色も同じでないと書いてあるのですね。私たちそのとおりでしょ。形は簡単に言ったら体型、色は皮膚の色、どちらも皆それぞれですね。今日は、ここへお見えになるために皆さん朝から時間かけてお化粧されていますけれども、家に帰って寝る前にペろっとめくったら、それぞれ地金が出てくるでしょう。それぞれ色も形も全部違っていいのですよ。金子みすゞさんに「みんな違ってみんないい」という詩がありますが、それを言っているのです。

ところが、私たちは「こういう人間でなければならない。ああいう人間でなければならない」

と何か理想の自分を作って、そうでない自分がなんか惨めで情けなくなってきた。「こんな自分であってはいけない。こんな私はだめだ」と自分で自分を値踏みして、結局「なんで私だけがこうなのだろう」と愚痴ぐちの元になつてくるのでしよう。

色も形も違つて『仏説阿弥陀經』に「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」と出ていますね。青いものは青いまま、黄色いものは黄色いまま、赤いものは赤いまま、白いものは白いままでそれぞれが光り輝いている。それぞれのままで良いということです。

大根は「俺、どうしてこんなに白いのか、もっと赤い大根になりたい」って言わないですよ。大根は形がいろいろです。市場で売っているのは真っ直ぐな大根です。うちのご門徒さん、お寺には形の整った良いものを持ってきてくださいます。けれども、お参り先には自分の所で引いてきた二股になつたような大根がいっぱい置いてあります。いろんな大根があります。それでも「俺なんでこんな形なんだろう」と、悩んでいる大根はないでしょう。どんな形でも大根は一所懸命にぐっと根を張つて生きております。人参は赤いままが良いのです。人間だけが「こんな自分であつてはならん」と文句言うのです。

犬でも猫でもそうです。うちに白ちゃんという猫がいました。この白い猫が「俺どうしてアメリカンショートヘアみたいに鮮やかなマーブル模様ではないのか」と悩むことはないですよ。いつも堂々と生きていました。猫はすごいです。死ぬ時です。白ちゃんは口の中に癌

ができませんでしたね、食べられなくなりました。だけど、食べられなかったら食べられないままに食べませぬね。それでどんどん弱っていきます。今日はもうあかんかなと思って「白、白」って呼んだら、「ふっ」と目開いて「もうちょっと生きているわ」という顔していました。次の日、朝起きてきて「白ちゃん生きているか？」って聞いたら、「ふくん」って返事はするけどもう全然ご飯食べません。夜、名前を呼びましたけど目も開かないようになってきて、それで十分ほどして、子どもが「白ちゃん」って呼んでみたのですけど「お父さん、白、死んでるわ」っていう具合です。すーっと死んでいきました。直接は癌で死んだのではなくて、食べられなくて衰弱死でした。

死んでいくというのも、生き物に与えられた果たして行かなければならない最後の仕事なんですね。猫は立派に果たしていきます。人間だけが「死ぬの嫌だ」って文句言います。

少し話がそれましたが、阿弥陀さまの方から私たちに「そのままで光り輝いているでしょ」と願ってくださっているのです。その願いに「なるほどそうやったな」とうなずけたら、どんなことがやってきても「これが、私が仏様からいただいた果たしていかなければならないお仕事だ」と、こういただいでいくことができるのです。確かに、嫌なことがあったら気持ちには沈むし、腹も立つし、どうしてかとも思います。けれども「なんまんだぶつ」と称えて仏様に

手を合わせ、阿弥陀様に頭を下げ、「自分の煩惱は嫌がっているけれども、阿弥陀様はこう促してくださった。これが本当の深い願いだ」と気持ちが変わるといふか、うなずいて行くことができるのです。

清沢満之先生きよざわまんしは「他方の救済を念ずる時」と「他方の救済を忘れる時」という表現をなさっていますね。「忘れる時」があるとおっしゃっていますから、いつもこんな心で居れると言われているわけではありません。私たちは、ほとんど念仏なんか忘れていきますよね。南無阿弥陀仏と仏様に頭が下がった時だけ「自分の煩惱の心よりも、つまり自分の煩惱が欲するものよりも、阿弥陀さんが願っておってくださいされたものの方が本物であった。私の本当の願いであった」と念仏するたびに気付かされるのです。そしたら一つ一つ、誠実に、丁寧に「お仕事を果たして行こうか」という意欲が湧いてくるのですね。

分別ぶんべつは役に立たない

第四願には、先ほど申しましたように、もう一つ「無有むいう好醜こうしゆ」の願という呼び方があります。これは「好きとか嫌いとか醜いとか綺麗とか、そういうことは本当は有ることが無い。つまり絶対に無いのだ」という意味です。つまり、私たちは何でも比べるでしょうと言っているのです。

私たちが、いつも比べては「好きだ嫌いだ、勝った負けた、損した得した」と言っていて、その上で勝ったり得したらちょっと傲慢ごうまんになってみたり、負けたり損したら卑下ひげしてみたりとふらふらして、堂々と生きていない姿を言い当てられているのです。

それにしても好きとか嫌い、良い人悪い人というのというのも結構いい加減ですね。あの人は良い人だというのは、私にとって都合が良い人を言っているのと違いますか。良い人とか好きな人、私の都合が作り出すのです。そのことを、よく教えていただいた出来事がありました。

去年のことですが、あるご門徒さんが両親の五〇回忌の法事を勤められました。そのご門徒さんというのが、無愛想ですごくお寺の批判をされるのです。ですから、どうも苦手で何となく避けていたのです。正直、私にとっては「嫌い」で「悪い」人です。そういうお宅でご法事をお勤めした後のことです。

ご主人がお寺に来られて「五十年間月参りしていただいて有り難うございました」と永代経の志を持参されたのです。帰られた後、それを持ちましたらすごく分厚くずっしりと重みがあるんじゃないですか。あわてて開封してみたら銀行の帯封がついていました。その途端に「あのおっちゃん、やっぱり良い人だった」と思えて、それ以来むちゃくちゃ「良い」人になりました。その人は何にも変わっていません。やはり今でも無愛想でお寺の批判もされます。

その時、思ったのです「このご主人は何も変わってない。でも私からの人物評は、百八十度

変わった」と。その人に良いとか悪いとかいう意味があるのではなくて、私の「都合」が、良いとか悪いとかの評価を作り出しているのですね。それを分別ぶんべつというのです。

ですから、第三願と第四願は「分別」というのは何の根拠もなく、本当は役に立たない、というのをわかってください」ということを言っていると思います。私たちはいつも頭で考えて「これが良いだろうか、あれがどうだろうか」と計るわけですね。計らうところに「好醜こうしゆう」好きとか嫌いとか、良いとか悪いとかが出てくるのです。その計らい、分別には、何の根拠もなく、役に立たないというのです。

「醜みにくい」とか「綺麗」とかもあまり根拠がありませんね。時によって変わってきます。平安時代の美人画ってだいたい太っていますよね。今だけですよ瘦せている人がもてはやされるのは。「好醜」は、時代によって変わるし、時と場合とよって変わるのです。私たちの思いとか分別とか考えるというのは、仏様の智慧の眼差しからご覧になったら、いいかげんで、役に立たない何の根拠もないものなのです。そのことに気が付いたらもっと楽になるでしょう。

南無阿弥陀仏と念仏するということは「分別が妄念妄想もうねんもうそうだった。役に立たん。勝手に思っているだけだった」と気がついたということです。そこには、広やかで大らかな世界が開かれますよ。ね。「ああ、これでいいんだ」という世界です。

じしんきょうにんしんまこと
自信教人信の誠を尽くす

私たちは、目の前にある与えられたお仕事にも、「善」「悪」といって価値をつけて分別して
いますね。例えば、お礼状出すといのは面倒くさい仕事、たくさんお礼をいただける仕事は良
い仕事と、分別するわけです。でも、報酬があってもなくても、全て私が果たしていかなけれ
ばならない尊いお仕事なのです。

目の前にある、小さい、こんなこととしても意味がないと思える仕事でも、大切な立派で尊い
お仕事だとかならずいていく。

それを最後までずっと考えていたら、死んでいかなければならないということも、立派で
尊い大切なお仕事であるということではないでしょうか。

病院のベッドの上で、ただ天井見上げている状態といたら、私たちの分別で考えたら情け
ないし「なんで俺はこんなことしているのだろう」という話になってきます。でも、あれは分
別する心がそう思わせるのです。そんな時に「南無阿弥陀仏」と、「仏様の本願の教えの方が本
当やった」と気がつけば「ああ、病院の天井を見上げているということも、仏様からいただい
た私が果たしていかなければならない大切なお仕事やったな」と、いただき直していくことが
出来るでしょう。もちろん「こんなのは嫌だ」という気持ちは消えないです。でも「大切なお

仕事だ」といただいでいけるのです。

そういう生き様ができるようになっていくと、何か仏教の香りのようなものが身から出てくるのではないのでしょうか。たぶん寺川先生みたいです。そうすると周りの人に伝わってきます。「この人、何か違うな。お寺に行ったら、私もこんな生き方できるのかな」「何かお寺というのは、世間の価値を超えたようなもの（出世間の教え）を教えてくれるみたい、それなら一回行ってみようか」となるのです。

まず私が、そういう「いぶし銀に光り輝くような人生」を歩んでゆく。具体的には、目の前にある果たしていかなければならないお仕事を、謙虚に、誠実に、一つ一つ果たしていくというところが大切です。

それにはやはり、信心ということ、本願にうなずくということが必要です。人間の努力とか考え方とかでは絶対実現しないのです。今まで散々努力して精進してきたけれども、どうにもならなかったのではないですか。自分から努力してそうなるうということではないのです。本願の教えに目が覚めていくところに、仏様の方から実現してくださるということなのです。

これが推進員に期待されていることだと私はいただいでいます。

だから、私自身が念仏に生きていく。そうすると、念仏に生きているというその姿を感じ取った方がまたお寺へ導かれていく。

それを仏教の言葉では「自信教人信の誠を尽くす」と言います。『(真宗大谷派)宗憲』の最初に書いてありますね。「自信」ですから自ら本願の教えを信じ、「教人信」とは「教えて人を信ぜしむ」と読めます。

しかし、教えるといっても私が教えるのではないのでしょうか。教えるのは阿弥陀様のお仕事だと思います。私は終始、本願の教えに聞いていく。その姿が本願の力によって自然と人に伝わっていくということだと思います。教えてやろうという根性では伝わらないでしょう。教えるのは仏様のお仕事です。

ここ堺南御坊へお話に来られていた伊東慧明先生は、「自信が自ずと教人信するのです」とよくおっしゃっていました。

私なんかは、すぐに教えてやろうと思うのですがそうではないのです。自らはただ信じていく、本願の教えにうなずいていく、その姿が阿弥陀様のお力によって、自然と教化というはたらきをするのだということです。

「推進員になったけれどもどうしていいのかな」という問いに対しては、ひとこと「自信教人信の誠を尽くす」という言葉、これに尽きると思います。

みなさまの奮闘を念じております。

合掌

本書は、2014年12月6日に難波別院堺支院（堺南御坊）
で開催された「第21組『推進員の集い』」の大橋恵真先生のお話を加筆訂正したものです。

この「推進員の集い」を開催するにあたり、下記検討会の推進員と住職で何度も打ち合わせを行いました。

その結果、「推進員とは何か」という原点を確認したいという推進員の方々の意向を受け、大橋恵真先生には「推進員になったけれども・・・」という講題でお話をいただきました。

それをこの度、より多くの推進員の方々の、活動のヒントや助力になることを願い活字として取りまとめた次第です。

最後になりましたが、本書の発行に御快諾いただきました大橋恵真先生に深甚の謝意を申し上げます。

2015年12月10日

「第21推進員連絡協議会」（仮称）等に関する検討会

推進員になったけれども・・・

2015年12月10日 初版発行

講 述 大橋 恵真
発行編集 大阪教区第21組教化委員会
「第21組推進員連絡協議会」（仮称）等に関する検討会
事務局 〒593-8312
堺市西区草部79
真宗大谷派大阪教区第21組以速寺

組版・デザイン Tatsumaro Yamao



おおはし えしん
大橋 恵真

1964 年生まれ 大谷大学大学院修士課程修了（真宗学）
大阪教区第 18 組おんきょうじ遠慶寺住職
2014 年度大阪教区「全推進員の集い」講師
難波別院定例法話講師 ほか

参考

てらかわしゆんしょう
寺川 俊昭 師

1928 年広島県に生まれる。1954 年東京大学大学院宗教学修了。
1987 年大谷大学長就任。1999 年大谷大学退任、名誉教授就任。
著書 『清沢満之論』『歎異抄の思想的解明』『親鸞讃歌』他多数

しんしゅうおおたにはしゅうけん
『真宗大谷派宗憲』

真宗大谷派における憲法的役割を果たす 101 条からなる最高規範。
その前文には、「すべてしゅうもん宗門に属する者は、常にしんきょうにんしん自信教人信の誠
を尽くし、どうぼうしやかい同朋社会のけんげん顕現に努める。」という文言がある。



真宗大谷派 大阪教区第 21 組教化委員会
「第 21 組推進員連絡協議会」(仮称) 等に関する検討会